

第二十二回 齋藤茂吉短歌文学賞

品田悦一 『齋藤茂吉』

—あかあかと一本の道とほりたり—

ミネルヴァ書房

選考委員

委員長 岡井 隆
委員 小池 光

三枝 昂之
馬場 あき子

【贈呈式】

平成二十三年五月十五日(日)

(五十音順)

品田悦一 『斎藤茂吉』 —あかあかと一本の道とほりたり— (抜粋)

短歌は直ちに「生のあらはれ」^{いき}でなければならぬ、と茂吉は言った（「いのちのあらはれ」、全集9）。作歌という営為は「かの大劫運のなかに、有情生来し死去するが如き不可抗力」であるとも言った（「作歌の態度」、同）。「生／いのち」が後に「深所のいのち」と言い換えられ（「生活の歌」、同）、さらには「自然・自己一元の生」と捉え直されたことから推察されるように（『短歌と写生』一家言」、同。以上圈点略）、茂吉が創作を通して相手取っていたのは、へ世界があることへとへ自分がいることへとが同時にひらけてくるような次元なのだった。存在の根源的な不可解さと対峙していた、と言ってもよいだろう。とにかく歌心が恐ろしく深いところから湧いたらしい。

『赤光』とは、生きてこの世にあることを大いなる奇蹟と観じた男が、まのあたりに生起するあらゆる事象に目を見張り、戦おのき、万物の生滅を時々刻々に愛惜しつづけた心の軌跡なのだと思う。そこには自明なことがらは何一つない。ことばを覚えはじめた幼児にとつてそうであるように、世界は真新しく、謎に満ちている。燦爛と光が降り注ぐただ中に変な裂け目がいくつもあって、途方もない暗黒が覗けている。茂吉の特異な言語感覚が、この根源的な生命感覚と共振するとき、「不可思議な奇異な感覚」（北原白秋）で読者の魂を揺さぶる歌々が生まれる。『赤光』が異化の歌集でもある理由はそこにあると思う。

農村不況にあえぐ世情のもと、ダンスホール事件の大々の報道は、「特権階級に対する民衆の潜在的な不満」（米田利昭）の表れである以上に、不満をことさら煽って当局の意図する方向に誘導する役割を果たしたに相違ない。「この非常時に」「非国民」といった非難は、声なき声となって茂吉を脅かしたと思われるが、彼の強烈な自意識は、汚名を完全にそそぐこと、非難を倍にして突き返すことを、彼自身に命じたはずである。国民歌人の役を全力で演ずることが茂吉の当為となったのは、おそらくそのときだったろう。

『柿本人麿』に心血を注いだ理由は、まさにここに求められる。妻に裏切られた「精神的負傷」（『白桃』後記）を忘れるために人麿研究に没頭したというような、巷間語られる観測は、動機を私的・逃避的に捉えすぎているし、当時の日本社会で人麿を論ずることに否応なく伴った意味をも、みすみす取り逃がしている。人麿は万葉随一の歌人である点において、日本人の民族的美質、優秀な文化伝統の表象にほかならなかった。そしてその表象は、国体の精華という観念と分かちがたく癒着してもいた。長谷川はそれを果敢に打ち壊そうと企て、茂吉はその企てを全力で阻止しようとしたのである。そのとき彼の自意識は極端に肥大して、自身の聖域を守り抜くことと時代の要請に応えることとの区別がつかないような構造となっていたらしい。

万葉調の国民歌人という、茂吉に割り振られた役割は、彼が全力で演じたこととまことしやかなものとなつたばかりか、あげくには役割のほうに茂吉を演じていたのであった。

総括的な評伝の出現

岡井 隆

久しぶりに出た齋藤茂吉の総括的な評伝として注目される。

初期の作風の形成について第一歌集『赤光』を中心に、万葉集との関係、「アララギ」の他の歌人との比較、言語論や韻律論にわたって詳細な論を展開している説得力がある。

従来の茂吉像をいたるところで偶像破壊的に批判的に改めているところも、著者の批評力の鋭敏さを示している。特に、著者自身万葉学者であるので、第二次世界大戦下の日本に起きた万葉ブームについても、それを背景に茂吉が書いた『柿本人麿』、『万葉秀歌』などの著作や、戦時下の茂吉の歌についても詳細で説得力ある解説をしている。

この著書をきっかけに、また新しい茂吉に対する理解が深化することが期待される。

新鮮な切れ味

小池 光

齋藤茂吉について書かれた本は実にたくさんあるが、その殆どは歌人によって書かれたものである。いきおい近代短歌の最高峰にある茂吉に対して畏敬の念と感情をそれぞれの内に秘めて、その書き物はどこかで感情的にならざるを得なかった。

この一冊は、そういう従来の茂吉論とはおもむきを異にする。著者は万葉集と近代の専門家であり、歌人ではなく、また世代的にも若い。縦糸に万葉集を配し、横糸に齋藤茂吉を配し、まったく斬新な茂吉の生と思想を鋭角的に解いてみせた。論理的にまことに明晰で、緻密に当時の文学また思想界をあざやかに浮き彫りにする。文章もきびきびとして歯切れよく、あたかもミステリー小説を読むかのような小気味よさを持っている。調査力と目配りの広さ、的確さは従来の茂吉論にはなかつた切れ味があり、思わず傍線を引かずにおれない記述が至るところにある。

こういう地道にしてエネルギーあふれる齋藤茂吉論に対し本賞が与えられることを喜びとしたい。

茂吉研究の新たな地平

三枝 昂之

「みちのくの農の子」はいかにして近代日本を代表する巨人となったか。これが品田版齋藤茂吉評伝の主題である。歌人は、そしてもっと広く文人は、作品がどんなにすぐれていても、それだけではこの国を代表する存在にはなれない。時代の課題や大きなうねりが加わることによって、初めて可能になる。

では、なにが齋藤茂吉を近代の巨人に押し上げたか。国民国家の精神的支柱として「発明された万葉集」という独自の観点を茂吉像に重ねて品田氏はこの難題と取り組み、実に刺激的な茂吉像を構築した。周到的な文献調査、丁寧な作品分析、そして読みやすい文体と読者を引き込む構成。茂吉研究を新たな地平に導く画期的成果として、この一冊の受賞を心から喜びたい。

信頼できる茂吉像

馬場 あき子

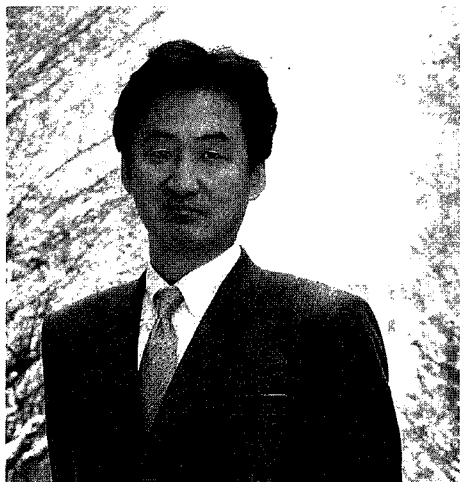
品田悦一氏の『齋藤茂吉』は、茂吉研究に欠かせぬ一級資料を駆使して、慎重にそして明快に、評伝的側面も加えつつ茂吉像を描き出している。富国強兵と近代化を急ぐ明治以降の日本の情況の中で、白熱化してゆく『万葉集』ブームを背景にしたとき、「茂吉ほど興味深い題材はない」という魅力的な視点から追求。

大著『柿本人麿』が学士院賞を得るに至る経緯をつぶさに検証し、「希代の奇書」と評価したのも新鮮。また、茂吉の『万葉集』への傾倒を、歌人としての、言語表現への執着からみていこうとする方向を出しているのも鋭い。これはやがて他の追隨をゆるさぬ茂吉の万葉調ともいえる文体につながってゆくものとして、歌人研究の面からも貴重なものといえるだろう。

十年前に『万葉集の発明』という本を出しました。『万葉集』を「日本人の心のふるさと」とする通念は近代国民国家の要請に沿って作り出された幻想である、というのが同書の基本的主張でしたから、幻想に愛着を抱く人々の反発を呼ぶことは必至で、特に歌壇関係者からは総すかんをくらうものと覚悟していました。が、意外にもと言うべきでしょうか、蓋を開けてみると、私の主張に賛同はしないまでも、正面から受け止めようとする反応が多く、ありがたいことに感じました。

このたび受賞の運びとなった『斎藤茂吉』は、私の表芸である万葉研究をそちのけにして心血を注いだ著作なので、内容にはそれなりの自負を抱いています。しかし、選評にも指摘されましたとおり、万葉調の国民歌人という従来の茂吉像を「偶像破壊的に批判」して、新たな茂吉像を対置しようとした書なので、郷土の偉人を顕彰しようとする人々にとっては不愉快きわまる代物だろうと思っていました。

このたびの受賞は前著との合わせ技かもしれません。暴言を連ねただけではないということ、見る人はちゃんと見ていてくださったのでしよう。選考委員はじめ、歌壇関係者の示された誠実なご判断に深く感謝するとともに、破壊的な論著にすら惜しみなく賞を下さる山形県民の度量に対しても、心から敬意を表したいと存じます。



第22回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

品田 悦一 (しなだ よしかず)

東京大学准教授。

1959年(昭和34年)、群馬県生まれ。52歳。

東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得修了。

聖心女子大学文学部教授などを経て、

東京大学総合文化研究科准教授。

【主な著作等】

単 著：2001年『万葉集の発明 国民国家と文化装置としての古典』

論 文：1991年「人麻呂作品における主体の複眼的性格」

1991年「人麻呂作品における主体の獲得」

1994年「人麻呂歌集旋頭歌における叙述の位相」

1999年「人麻呂歌集の七夕歌」

2001年「七世紀の文学は上代文学か」

受賞歴：1989年度 第15回日本古典文学会賞

2001年度 第19回上代文学会賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店
第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社
第十二回 森岡貞香 『夏至』 砂子屋書房
第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
第十四回 藤岡武雄 『書簡にみる斎藤茂吉』 短歌新聞社
第十五回 清水房雄 『獨孤意尚吟』 不識書院
第十六回 小池 光 『滴滴集』 短歌研究社
第十七回 三枝昂之 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
第十八回 花山多佳子 『木香薔薇』 砂子屋書房
第十九回 永田和宏 『後の日々』 角川書店
第二十回 河野裕子 『母系』 青磁社
第二十一回 伊藤一彦 『月の夜声』 本阿弥書店

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県生活環境部生活文化課内

TEL・〇三三―六三〇―二九〇三